

令和 3 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属駒場中・高等学校	校長名	北村 豊
幼児・児童・生徒数（R4.3.1現在）	中学校 368 名 高等学校 489 名	学級数	中学校 9 高等学校 12

2 教育目標等	
① 学校教育目標	「自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」の理念のもと、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、国際社会で活躍できるトップリーダーの育成をめざす。
② 学校経営方針	学校教育目標達成のため、本校の伝統的な全人教育を基盤に、第 2 期中期目標・中期計画で本学附属学校が定めた 3 つの拠点（「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」）構想の成果を活かし、第 3 期中期目標・中期計画で掲げている「グローバル人材育成」と「インクルーシブ教育の推進」を積極的に実践する。先導的教育拠点として、SSH 研究開発「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探究型学習システムの構築と教材開発」（第 4 期 5 年次）の研究成果を発信し、次期 SSH 研究開発への方針を検討する。教師教育拠点として、本校の教育活動の発信と教員免許状更新講習の充実を図り、中等教育の発展に寄与する。国際教育拠点として、生徒の海外派遣や国内での国際交流を通して、国際社会で活躍できる人材の育成をめざすとともに、ICT を利用した国際交流の可能性を検討する。
③ 重点目標	<p>「国の拠点校」「地域のモデル校」として、本学附属学校の 3 拠点構想の成果を活かし、本学との連携の下、以下の 4 プロジェクトを中心に全教職員で取り組んでいく。</p> <p>① コロナ時代の学校生活プロジェクト コロナ時代においても、生徒と教員にとって有意義な学校生活であり続けるための取り組みを分析・考察し、情報を提供する。</p> <p>② 駒場流 不易と流行の教育デザインプロジェクト 本校が培ってきた「学び」の本質を提供し続けるための人・モノ・コトの相互作用について考える。</p> <p>③ 駒場レガシーの継承と活用プロジェクト 筑駒の育てる「力」とは何かを検討し、発信する。また、OB との連携や地域への貢献にも取り組む。</p> <p>④ 対外交流再構築プロジェクト 他附属校や海外学校との交流のあり方を捉えなおす。また、ユネスコスクールや SDGs などの視点から世界の中の駒場を考える。</p>

<p>④ 前年度（令和2年度）の成果と課題</p>	<p>昨年度は、4つのプロジェクト①生徒を多角的視野でみるために、生徒の可能性の発掘、②学びとカリキュラムのデザイン、③協働・コラボ推進、④教育のグローバル化の調査・研究と国際交流を、全校体制で推進してきた。その成果と課題は以下の通りである。</p> <p>【成果】</p> <p>①コロナ禍の影響を受けた昨年度の音楽祭の開催方法について生徒アンケートを実施し、次年度の開催方法を提案した。6年間の生徒の生活習慣の変化を調査し発表した。身体的に多様な生徒の入学に対応するための動線確保の調査とその提案を行った。生徒の内面的調査を行い、教員が生徒を知る一助となる情報を提供した。</p> <p>②コロナ禍の影響によって始まったオンライン学習の調査検証を行い、生徒の学習状況を把握した。校内のICT環境整備を見直し、GIGAスクールへの課題を整理した。探究学習のマネジメントと評価方法を検討した。道徳科授業の実践結果を集約した。また、道徳を震災学習と組み合わせて実施する試みも行われた。高3生徒が記録した学びのポートフォリオから、在学中に養われた力を調査分析した。</p> <p>③「筑駒アカデミア」としてオンラインによる卒業生の講演を実施した。また、進路懇談会や学年講演会などにおける招聘OBのデータを収集・整理し、教育成果の発信と社会貢献を図った。インクルーシブ教育の実践として附属特別支援学校とのオンライン交流を実施した。</p> <p>④生徒のオンライン研究交流（台中市立第一高級中学）、国内での国際交流（イングリッシュルーム）及び各プログラムの教育的効果分析の評価を実施し、教育のグローバル化への対応を検討した。</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SSH研究開発事業の次期SSHの事業の検討を進める。
---------------------------	---

<h3>3 重点目標達成についての総括的評価</h3>	
<p>先導的教育では、SSH研究開発の柱である探究型学習の教材開発と「理科課題研究」や学校設定科目である「課題研究」の実践を進めた。今後の課題は、新学習指導要領に対応した評価法の確立、「GIGAスクール」構想を高校へ拡張するためのプラットフォーム構築、SSH研究開発事業後を見据えた新たな研究開発テーマの獲得である。</p> <p>教師教育や社会貢献では、「第48回教育研究会」（国語科・数学科・保健体育科・芸術科）をオンサイト・オンラインのハイブリッドで開催し、「SSH数学科教員研修会」をオンラインで開催した。さらに例年、会場として企画・運営・講師を担ってきた「教員免許状更新講習」はその一部をオンラインで実施した。また、地域に貢献する「筑駒アカデミア」事業として、本校生徒対象に実施した2件の講演会について、地域（世田谷区や目黒区）住民に向けオンデマンド配信を行った。さらに、目黒区が主催する区内等教育機関との連携講座や本校教員と生徒が一体となって行う地域の小学校への出前授業も実施した。この「筑駒アカデミア」は、持続可能な財政基盤の確立が課題である。</p> <p>国際教育では、SSH事業として実践してきた台中市立第一高級中学との生徒研究交流会をオンラインで開催した。また、長年交流のある釜山国際高校が主催するオンラインプログラムに参加し、いずれもこれまでの関係を維持することができた。研究発表等のプレゼンテーションスキル向上を目的とした「SSH英語プレゼンテーションワークショップ」や「イングリッシュルーム」も、上記プログラムに先立ってオンラインで実施された。これら拠点事業を推進する上で不可欠な財政的基盤の確立と老朽化した施設の改善が依然として大きな課題である。</p>	

4 令和4年度の学校課題

「国立大学附属学校の新たな活用方策等」や「有識者会議」で示された附属学校の使命・役割である「実験的・先導的な学校教育」を念頭に、実験的・先導的な教育課題への取り組みと長期的視野に立った教育環境の改善を重点目標に定める。

また、「国の拠点校」、「地域のモデル校」として、本学との連携の下、前年度から継続したテーマで取り組む校内プロジェクト①～④（第2年次）について、全教員で取り組みながら、筑波大学附属学校の第四期中期目標・中期計画で掲げている「インクルーシブ教育」と「グローバル人材育成教育」を積極的に推進していく。

①コロナ時代の学校生活プロジェクト：コロナ時代においても有意義な学校生活であり続けるために、多様な取り組みを行い、具体化する。

②駒場流 不易と流行の教育デザインプロジェクト：本校が培ってきた「学び」の本質を提供し続けるための人・モノ・コトの相互作用について考える。

③駒場レガシーの継承と活用プロジェクト：筑駒の育てる「力」とは何かを検討し、発信する。また、OBとの連携や地域への貢献にも取り組む。

④対外交渉再構築プロジェクト：他附属校や海外学校との交流のあり方を捉えなおすとともに、将来構想やSSH後の教育活動について考える。

なお、4つのプロジェクトの全てで、令和5年度をもって予算経過措置が終了するSSH研究開発に代わる新たな事業等、将来構想について検討を行う。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

4つのプロジェクト毎に具体的に取り組む内容を以下に挙げる。(①～④は「4 令和4年度の学校課題」と対応)

①コロナによって影響を受けた教育活動や生徒・教員のメンタル面に目を向け、必要となるサポート体制や環境の構築を目指す。また、将来を見据えた「働きかた改善」を考えた意見の集約を行い、提言をまとめる。

②GIGAスクール構想やコロナ禍でのオンライン学習など、時代とともに外的要因が刻々と変化するなか、本校が培ってきた「学び」の本質を抽出し、芯の通った教育を提供し続けるための「人（生徒、教員）」、「モノ（教材、教具、ICT機器）」、「コト（カリキュラム、理念、コンテンツ）」の相互作用について、実践的かつ広い視野で考える。

③教駒・筑駒はいかなる「力」を育ててきたのか？それを言語化し発信するためにも、若葉会（同窓会）・卒業生との連携をより意識的に行いたい。加えて、地域貢献の観点から筑駒アカデミアと目黒区共催講座の運営も担う。

④他附属校や海外学校との交流のあり方〈世界の中の駒場〉を考える。また、これまで実践してきた国際交流プログラムや特別支援学校等との交流プログラムの成果について精査し、本校の将来構想へつなげる。

なお、4つのプロジェクトの全てで、令和5年度をもって予算経過措置が終了するSSH研究開発に代わる新たな事業やスクールミッションの更新など、将来構想に関わる検討を行う。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- ・『筑波大学附属駒場論集第61集』筑波大学附属駒場中・高等学校（2022.3）
（教員の個人・教科グループ等による研究成果は、上記論集 p.207～213に掲載）
- ・『平成29（2017）年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書第五年次』筑波大学附属駒場中・高等学校（2022.3）
- ・SSH創造的な教材・指導法及びカリキュラムの開発 - 中高6カ年から大学へ - 「開発教材集2004年度～2021年度」（2022.3）
- ・『第48回教育研究会報告書』筑波大学附属駒場中・高等学校（2021.12）
- ・生徒の活動一覧（国際科学オリンピックでのメダル獲得など多数）

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和3年度

学校名

筑波大学附属駒場中・高等学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	<p>体験的な学習として、中1と高1ではケルネル田圃での稲作実習を実施した。また、フィールドワーク中心の実践的な学習として、中2では「東京地域研究」、中3では「東北地域研究」(2泊3日)、高2では「関西地域研究」(3泊4日)を実施し、高3では年間を通して「総合発表」に取り組み、文化祭でその成果を発表した。</p> <p>主体的な探究学習としては、中3では「テーマ学習」、高2では「課題研究・理科課題研究(ゼミナール形式)」、高3では「課題研究・理科課題研究(個別研究)」を実施した。また、教科主体で企画した「水俣実習」(3泊4日)、「福島フィールドワーク」(2泊3日)なども実施した。</p>
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	<p>本校の学校行事は、これを計画・準備していく役割を担う委員会を伴う。構成する委員が互いに共生・協働する「場」が自主的・自律的な行動を自然と促し、リーダーシップとフォロアーシップを涵養する。令和3年度においては、新型コロナウイルス感染症の影響により学校行事の一部は中止、また、実施できたものも規模縮小を余儀なくされたが、不自由な環境の中でも価値の高いコンテンツを作成・提供しようと試行錯誤する「場」を受け継ぐことができるよう、持続可能な委員会の整備を進めた。</p>
6-1-1	特別支援学校や特別支援学級と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	<p>高校2年生の課題研究の一つである「障害科学・ともに生きる」では、筑波大学附属大塚特別支援学校、聴覚特別支援学校のほか大学・研究機関、卒業生等の協力のもと、さまざまな障害を持つ方々や関係者との交流や研修を通して、学習を進めた。新型コロナウイルス感染症の影響により、宿泊を伴う「三浦海岸共同生活」は中止となった。</p>
7-1-2	校務分掌や主任制等が適切に機能するなど、学校の明確な運営・責任体制の整備の状況	<p>新たな定員(研究員)の確保、分掌の係の新設と再編、教務補佐員の活用、外部業者への委託、卒業生の活用を進めるとともに、持続可能な組織の整備を進めた。</p>
12-1-4	大学、附属学校教育局と連携した多様な学習内容・学習形態などに対応した整備の状況	<p>創立70周年募金活動によって得た資金をもとに、多様な学習形態に対応できる特別活動室の設計・建築計画を大学、附属学校教育局と連携しながら進めた。また、新型コロナウイルス感染症の影響により登校できない生徒のため、各HRから授業のオンライン同時配信を行えるようシステムを構築した。</p>
12-1-5	大学、附属学校教育局と連携した学校教育の情報化の状況	<p>専門性を有する司書を継続して雇用し、学術コンテンツ・学習リソースが活用可能な図書メディアセンターの充実に努めた。また、Google Classroom、Microsoft Teams等のアプリケーションを用いた授業コンテンツのさらなる充実化を図るとともに、GIGAスクール構想に基づき中学校に導入された端末のための通信環境整備を行った。</p>

14-1-3	先導的教育研究	SSH 研究開発事業では、探究型学習の教材開発と「理科課題研究」や学校設定科目である「課題研究」の実践を進め、その成果を、全国の SSH 生徒研究発表会や台中市立第一高級中学での生徒研究発表等を通して国内外に積極的に発信した。また、主体的な探究活動を支える基礎力育成を目的として、理数以外も含め、各教科で専門家による特別講座（講演・実習等）を企画・実施した。さらに、国立教育政策研究所の実践研究協力校として、公民と理科（物理）の研究を進めた。一方、新型コロナウイルス感染症の影響により、中学3年と高校2年で予定していた「筑波大学訪問」は中止となった。
14-1-4	教員養成・教師教育	教育実習を年2回（3週間ずつ）実施するとともに、「第48回教育研究会」（国語科・数学科・保健体育科・芸術科）をオンサイト・オンラインのハイブリッドで開催した。また、「SSH 数学科教員研修会」をオンライン開催し、授業の様子を含めた日頃の教育活動や SSH で得た成果を発信した。例年、会場として企画・運営・講師を担ってきた「教員免許状更新講習」はその一部をオンラインで実施した。
14-1-5	国際交流・国際貢献	SSH 事業として実践してきた台中市立第一高級中学との生徒研究交流会をオンラインで開催した。また、長年交流のある釜山国際高校が主催するオンラインプログラムに参加し、いずれもこれまでの関係を維持することができた。研究発表等のプレゼンテーションスキル向上を目的とした「SSH 英語プレゼンテーションワークショップ」や「イングリッシュルーム」も、上記プログラムに先立ってオンラインで実施した。
14-1-6	社会貢献	<p>「筑駒アカデメイア」事業として、本校の人材（生徒・教員・卒業生・保護者）を活用し、本校生徒対象に実施した2件の講演会について、地域（世田谷・目黒）住民に向けオンデマンド配信を行った。</p> <p>また、目黒区が主催する区内等教育機関との連携講座も開催した。</p> <p>さらに、教員が本校生徒と一体となっていく地域の小学校への出前授業も実施した。一方、例年実施してきた筑波大学と連携協定を結んでいる茨城県大子町の小学校等への出前授業については、新型コロナウイルス感染症の影響により実現できなかった。</p>